

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

護る神から守られる神へ：
韓国とベトナムの鯨神信仰を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 善愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009436

護る神から守られる神へ — 韓国とベトナムの鯨神信仰を中心に

李 善愛
(宮崎公立大学)

1 はじめに

クジラは古くから食料や信仰など人と多様なかかわり方を保ち続けている。もっとも古いかかわり方としては、食料肉や油の利用であるが、宗教や政治的あるいは伝統的習慣などの理由でクジラを食料としない時代や地域もある（フレデリック 2002）。そのため、クジラは食用すべきものあるいは食用してはならないものという問題を中心に論じられてきた。しかし、クジラは時代や地域によっては、神の使い、人命救助と豊漁をもたらす神として信仰され（渡邊 2006; 大西 2008）、近年は動物福祉や環境保護運動、開発などの影響で保護すべき海獣として新たなかかわり方を迫られつつある（河島 2011; 岸上 2017）。そのため本研究では、韓国とベトナムにおける鯨神信仰に焦点をあて宗教人類学的観点からクジラと人のかかわり方の多様性とその背景について明らかにする。

韓国におけるクジラは古代には食料と信仰の対象に、中世には油の利用に、近年はその肉を主に利用されてきた（朴 1987, 2003; 李 2012）。最近では地域振興のための観光資源、環境保全の象徴となっている。日本でもクジラの肉と油を利用してきたが、多くの地域では現在も恵比寿として信仰されている。恵比寿は豊漁で漁民の生業を守り、福をもたらす神として、決して人間に害を与えないと信じられている（小島 2009）。一方、ベトナムにおけるクジラは生命救助と幸福や豊漁をもたらす神として信仰されているが（大西 2008: 39-48）、食料や油の利用の対象にはなっていない。しかし、近年の漁村の開発や都市化によって鯨神信仰がなくなったり、地域振興のための観光資源として重要となったりしている。

2 ベトナムの鯨神信仰の由来と地域性

2.1 鯨神信仰の由来と発展

南北に細長いベトナムは（地図1）、北部のキン族によって千年間の中国支配から10世紀に独立する。そして南部への勢力を拡大し、1802年に全土を統一したグエン王朝は首都を北部のハノイから中部のフエに移る。一方、ベトナム中南部にはチャム族によるチャンパ王国がホイアンを拠点に海上交易で2～18世紀に海洋国家として栄え、インド

のヒンドゥー教やイスラム教の影響を受けている。南部からカンボジアにかけては、クメール族により支配されていた。



地図1 ベトナムの全体図（Google Mapをもとに筆者追記）

ベトナム中部以南の沿岸は水深が200m以上でザトウクジラ、ナガスクジラ、イルカ類など30種類が棲息しているが、捕鯨活動は見当たらない。ベトナム中部以南地域人口の約8割を占めるキン族は、クジラが人命救助と豊漁をもたらす神と信じて南海王あるいは南海將軍の名で祀っている。キン族はもともと農業を主な生業とし、山神を信仰していたが、インドシナ半島の東海岸を南下しながら海上交通と漁業に従事する中でベトナム中部沿岸原住民のチャム族によって信仰されていた海神を信仰するようになる。鯨神はその海神の一つで、グエン王朝期（1802～1945年）には国家祭祀の信仰対象として発展していく。

とりわけグエン王朝期に鯨神信仰が発展した大きな背景には、南シナ海の状況とベト

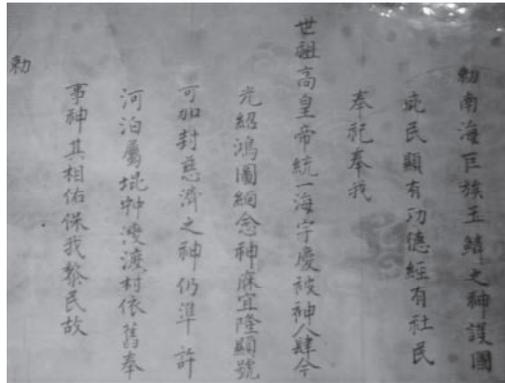


図1 王がクジラ廟に送られた冊封状（2008年に筆者撮影）

ナム中部にある首都フェまで南部メコンデルタの穀倉地帯からコメなどの物資を輸送する海上交通の発達がある。キン族が鯨神を祀るようになったのは、グエン王朝初代の嘉隆帝が乗っていた船が沈没したとき、クジラによって救助され、嘉隆帝はクジラに南海巨族玉鱗上等神という神号を与えたからである。グエン王朝地理書『皇越一統地輿志』（1806年）に、現在のベトナム中部と南部の境界地域に位置するファンティエトでは「南海巨族玉鱗尊神」というクジラの称号が記されている。また、南部ベトナム全体地理書『嘉定通志』（1820年）にも同じ記録があり、グエン王朝初代の嘉隆帝時代からクジラが国家祭祀の信仰対象となって南海巨族玉鱗尊神という神号が付与された（図1）。『嘉定通志』によると、クジラは、漁のときは漁民のため魚群を駆り立てて全ての網に追い込み、海上で嵐により沈没に瀕するときは船を挟んで支えて船人を落ち着かせ、船が沈没するときは人を救助する。さらに、今の中部クアンビン省ザイン川から南部ハティエン省に至る海域では鯨神の靈験があらたかであると記されている。ハティエンはカンボジアの国境に近いところにあり、やや中部から南部までにかけてクジラが人命救助と漁業協力で人間に利益をもたらす靈験があると認められていた（大西 2008: 39-48）。

ところが、グエン王朝の年代記『大南寔録』（1836年）によると、第2代王の明命帝は、「玉鱗や海龍というクジラの名称は間違った言い伝えに過ぎない。クジラは人命救助を好むのでその名を仁魚と呼ぶ。北部のクアンニン省から南部のハティエン省以外の地域では仁魚の靈験はなく、鯨油をとる人が多い。仁魚は風難に襲われた人民を救助してきたので、その死体がフェ周辺の河口に漂着したら布や銭を支給して埋葬せよ」と記している。つまり明命帝は嘉隆帝期に定められた鯨神号の玉鱗やクジラが神であることを認めなかったが、ベトナムの全海域にクジラの靈験があることや人命救助をすることは認めたのでその死体の保護を命じている。ホーチミン市内のリーニョン亭には鯨神が祀られており、コミュニティーハウス兼鎮守の社として、明命帝（1824年）が送った冊封

状が保管されている。その冊封状には「南海巨族玉鱗之神」と記されている。こうした記録からグエン王朝期に盛んだった鯨神の信仰範囲は、明命帝初期は中南部海域までであったのが、明命帝後半には北部海域にまで拡大していく（大西 2008: 39-48）。

しかし、2011年現在、北部地方にはカトリック信仰の影響で鯨廟が無く、中部地方のニャチャン以北は移住してきた福建人の影響で鯨神を関羽と同じ廟で祀る。南部地方はヒンドゥー教シバ神の影響で鯨神が女神と一緒に祀られている。

2.2 中部地方鯨神信仰の特徴

ニャチャン市内にある塩永亭（写真1）には、村の守護神の五代虎將軍神，祖先神を祀っている前賢廟，主神の鯨神を祀っている南海殿（写真2），さすらい神の陰魂弧魂，



写真1 塩永亭



写真2 南海殿

(写真1・2は2008年に筆者撮影)

農業神の土徳夫人や火徳夫人を祀っている五行廟がある。村によって祀っている夫人は異なる。ベトナムにおける亭の周辺には市場（写真3）があって世俗空間の一部となっている。クジラの死体が海岸に押し寄せられると、村の成人男子は亭に祀っている冠を被ってクジラを迎えに行く。冠の前には冊封状が置かれてある。クジラの死体は村人たちによって3年間土葬した後、春と夏の間に洗骨して木棺あるいは壺に入れて亭に安置しておく。昔、クジラの死体が発見された旧暦2月11日をクジラの命日とし、毎年2日間祭っている。



写真3 クジラ廟前の市場（2008年に筆者撮影）

ニャチャン市ビンタン・タイン村にある芝芝亭は、屋根の上には魚が、柱には龍が裝飾されていて、村人は魚が龍に変わって天を登ると信じている。亭には鯨神を主神と祀る南海殿があり、鯨骨が赤色の棺に安置されている。2001年3月18日に13歳の村の少年がクジラの死体を発見したので、旧暦の3月18日を命日にし、その日に鯨神祭も行う。鯨神祭のため朝5時に水軍の服装をした村人の船団が海に出て鯨神の霊を迎えて来て南海殿に祀って仏教儀式で漁民や村民の豊漁や幸福を祈願する。漁民は鯨神を迎えに行くことは非常にめでたいことと思っている。その日の午前11時から夜10時までは老人女性は聖歌を歌って踊って、男性たちは劇団で演劇をし、祭日を楽しむ。翌日の3月19日は雌鯨の命日で朝8時から祀る。鯨神祭には村人47組105名が参加している。南海殿には19世紀半ばに王から10回送られた冊封状が保管されている。亭はベトナム戦争のときアメリカに渡って成功した村人の寄付金で新築されている。海岸に寄せられたクジラの死体を埋葬したり洗骨したりするとき腐敗した匂いが酷くても村長や村人は祖先のように厳格に行う。2006年に埋葬した鯨骨も洗浄され南海殿に安置されている。村の27名の漁民は海上で台風に遭遇して死を覚悟したときにクジラに救助された経験がある。

ニャチャン市内の盛萬亭にはベトナムの上級神の鯨神や天衣阿那聖母、村の守護神の城隍神や白馬神が祀られている。天衣阿那聖母はチャム族の女神と中国福建省の女神が複合された神で、中部地方を中心に信仰されている。城隍神は1945年以前まで僧侶、泥棒など多様な階層の人を神として旧暦2月に祀っていた。亭は神聖な場所と見なされる3つの川が合う地点に立地するが、川魚が少なくなったところや、都市開発で漁民が海や川を離れたところは鯨神祭も消滅している。ニャチャンは風水信仰が強く、寺院の南方の海側は青龍、北方の山側はカメ・コウモリ・白馬を配置し、池を作ることで山脈の力を維持している信じ、都市開発で道路を作る数年前から龍とカメが泣いて村に良いことが起らないという。コウモリは、昔は怖い神であったが、今は優しい神となってい

る。ヨーロッパ人のバカンス地として有名なニャチャン市ティ島では、観光客を意識して2年おきに鯨神祭が盛大に行われる。この島ではクジラの死体を青年が発見した場合、その人は3年間結婚を禁じ、既婚者の場合は3年間出産が禁じられている。

ニャチャン市内の蚪牢亭には鯨神を祀る南海廟でクジラの命日の旧暦6月16日に鯨神祭を行う。1995年から女性も鯨神祭に参加できるようになった。この地域は大型商船が密集する水上交通の中心地として商業が繁盛したところである。海岸にある鯨陵から1キロメートル離れたところに鯨廟があり、鯨神祭の日に鯨神を神輿で廟まで担いで行き、祭が終わると陵に送り戻している。この地域は鯨神祭を行うと鯨神が興奮して風浪をたて起こすので怖い神とされている。

ファンラン地域のランハイ村(写真4～6)は、山が近く大きな川がある海岸に面して位置している。村人によると、キン族は、鯨廟に鯨神を祀って豊漁を祈願していたチャム族の鯨神信仰をそのまま受け継いでいるという。2003年現在、ランハイ村の人口は2,398名、世帯数は738戸で、主に漁業に従事している。村の経済的事情が悪く鎮魂祭と海で鯨神の霊を迎える儀式は省略し、豊漁祭のみ毎年旧暦2月19日から20日まで2日間



写真4 ランハイ村の亭



写真5 鯨廟と鯨骨



写真6 地方官吏とクジラに救助された村人

(写真4～6は2008年に筆者撮影)

簡単に行い、3年か5年おきに盛大に祀っている。しかし、2008年に村の鯨神祭が歴史文化遺産に指定され、助成金と村人の寄付金で祭祀施設を改築する予定である。鯨神祭は僧侶が読経をしてから始まる。1944年生まれの同村の男性は1969年25歳のとき、漁に出て風浪に会い、漁船が沈没する際にクジラに救助されたという。

ファンティエットの萬秀水亭(写真7~14)は1699年にでき、鯨骨は100体以上ある。村人によると、巨大なクジラが漂流してきたときは2日間かけて埋葬し、村人から資金



写真7 鯨廟



写真8 関羽と鯨神



写真9 僧侶と村人



写真10 女神鯨廟



写真11 クジラとイルカの土葬



写真12 展示場の巨大鯨骨



写真13 筏船



写真14 漁網の手入れをする村人
(写真7～14は2008年に筆者撮影)

を集めて長さ20メートルの棺を作って鯨骨を入棺したという。関羽と鯨神を守護神とし、関羽は1年おきに旧暦の1月15日に祀る。この村では4人がクジラに救助されたことがあり、その中の2人だけ村に現存している。クアンナム省以南から鯨廟が多い。漂着されてきた雄クジラの死体は3年間、雌クジラは1年間埋葬した後、洗骨して入棺する。漁期の始まる4月20日には鎮魂祭と迎神祭を、6月20日には豊漁祭を盛大に祀って、漁期が終わる8月20日に最後の送神祭を行うが、地域や村によって祭日や規模などが異なっている。この村は筏船で獲った魚を利用して作った塩辛が有名であるが、観光地として開発するため鯨廟に安置してある巨大な鯨骨を別棟に陳列して観光客からとった入場料を村の収入源にしている。

ニャチャン海洋博物館によると、ニャチャン地域では、豊漁祭を行う前には施餓鬼や他の神の嫉妬を防ぐため先に鎮魂祭を行う。それから海に出て鯨神を迎える迎神祭を行い、村の鯨廟で豊漁祭を行う。鯨神はクジラの模型をして村に連れて帰るが、これらの儀式に参加するのは村人たちにとって非常にめでたいことで、村全体が盛り上がる。漁民や村民の豊漁・豊穰と幸福を祈願するために仏教儀式も導入しているという。

漁民たちは海でクジラを見たり、漂着されたクジラの死体を発見したりすると、めでたいと思い、死体は3年間埋葬してその骨は鯨廟に安置し、毎年命日を旧暦で厳格に祀っている。また旧暦の3月から6月までの漁期には、鎮魂祭、迎神祭、豊漁祭、送神祭を行うが、祭の規模や祭日などは村別に異なる。旧暦の9月から2月までの間は台風や季節風の影響で漁業が困難である。風が少なくなり、魚群が海岸に寄って来る3月、4月初旬頃一番先に行うのが鯨神祭である。遠海魚種のマグロ漁を主に行うが、不漁のときは近海でイカやエビ漁をする。

中部地方は廟や亭の主神が鯨神のところが多いが、廟や鯨神祭の規模は村の経済状態によって異なる。鯨神は18世紀末から19世紀初頃に女性信者が多くなったことで、中性の神が女神化している。フェではコイも龍になると信じているので食しない。鯨神を迎える迎神祭は豊漁祭の中で一番重要な儀式として、迎えの漁船が多ければ多いほど漁獲量が増えると思われている。迎神祭を行う日の早朝に一番大きな漁船に鯨神を乗せる神輿を載せて港から数百隻の漁船が一斉に海に出る。

このように中部地方には必ず各村に主神の鯨神を祀る廟や亭があるのは、鯨神が人命救助や漁業と密接な関係を持っているためである。しかし、漁の衰退や漁村の都市化で、鯨神祭が消えたり、その規模の縮小や回数が減少したりする。一方、鯨神祭は地域振興のための観光資源として重要となり、その規模も巨大化している。また鯨神の神体は展示されて観光客からの現金収入源になる文化変容が起きている。

2.3 南部地方鯨神信仰の特徴

ホーチミン市、ブンタウ市、カンゾ県の鯨神祭祀施設にある冊封書にはグエン王朝の年号が記されている。ホーチミン市カンゾ県の南海水将翁陵（1816年）と、ブンタウ市の勝三神亭内の南海翁陵（1824年）は、グエン王朝初期のものである。南海翁陵の横にはクジラが描かれており、玉骨と呼ばれている鯨骨がガラスの箱の中に神体として安置されている。南部地方の鯨神は副神として他の主神と合祀されることが多い。ホーチミン市タンアン亭の主神位牌には「大乾國家南海大將軍」という2つの重要な神名が混合されている。この神名の前半は「大乾國家四位聖娘」というグエン王朝の重要な海神名であり、後半は「南海大將軍」という鯨神名である（大西 2008: 39-48）。

ブンタウ市などベトナム南部地方の鯨神祭祀施設では、ノコギリザメの歯を合祀しているところが複数ある。これは人命救助を怠けたクジラを天がノコギリザメを使いとして送って懲罰したためクジラが分断させられたことを示すものである。この祭祀施設はクジラの死体が分断されて漂着した場所のみ分布するという（大西 2008: 39-48）。

鯨廟の多くは河川や河口に面して立地している。ブンタウ市の勝三神亭とホーチミン市カンゾ県の南海水将翁陵は湾の入口にそれぞれ向かい合っている。またホーチミン市に隣接したドンナイ省にはグエン王朝の生命の源となる大穀倉地帯に行く主要水路に鯨

廟が立地している（大西 2008: 39-48）。こうした南部地方の鯨神は絶対視されることなく海神の一つとして19世紀初期のゲン王朝期に海上安全や豊漁を祈願して祀られてきた。

このようにゲン王朝期に発展した鯨神信仰が中部と南部の地域差が現れる理由は2つにまとめることができる。

まずは、海上活動をする海の状況と気象条件の過酷さにある。南シナ海は熱帯海で頻繁に発生する台風と季節風の影響により魚群の形成が不安定である。また、熱帯海にはルリスズメダイのようにきらびやかで見た目がよく水族館に適した魚類は多いが、食用に適した魚の種類や数量は少なく胴体も小さいため、水産資源が乏しい。しかし、沿岸漁業が中心であるため、これに対応できる漁撈技術や漁具が発達していない。それに北東季節風が吹く11月から翌年の1月にかけての南シナ海は時化の日が多いため、小型漁船の年間操業日数は60～80日間と少ない。北部と中部地方は台風の影響を多く受けるが、とりわけ中部地方の沿岸は大型台風が世界で最も強く吹く海岸の一つで、5月から12月の間にかけて台風と熱帯性低気圧が頻発するので、漁民にとっては利益より危険の多い海となる。そのため、漁民たちはたまに沿岸に魚群が形成されると、クジラが魚群を追い込んで漁民の漁業に協力していると信じる。また、海難事故のときにはクジラに救助されることもあって、漁民は自然に鯨神を絶対神として厚く信仰する。一方、南部地方は台風の影響が比較的少なく、水産資源が豊富であるため、クジラを絶対神化していない（大西 2008: 39-48）。

次は、ゲン王朝期の水軍が首都フェまで物資を運ぶ海上輸送に従事していたことにある。首都フェは背後にアンナン山脈がカンボジアとの国境となり、天然の要塞として防護は堅固であったが、耕作面積が狭くてすべての物資を南部からの海上輸送に絶対的に依存しなければならない。しかし、キン族は海に隣接している地理的条件にもかかわらず航海や造船技術をあまり発達させなかったため、海上での死者が多く、輸送を担っている水軍や漁民が海上安全を鯨神に求めなければならず自然に鯨廟が発展するようになる。明命帝時代には約2,000隻の船が物資の輸送に使われていたが、中部地方の海は深く海況も非常に悪かったので、ゲン王朝初期から海難事故が頻発していた。そのためゲン王朝の嘉隆帝と明命帝は海上輸送が無事だったときは、海神の力であったことに感謝する儀礼も行なった。それに海上輸送を担う水軍の士気を高めるために鯨神信仰を発展させたのが現在まで続いている（大西 2008: 39-48）。

中部地方のニャチャン地域は250年前から鯨神祭を行なっていて、南下した漁民たちは移住先でも鯨神祭を伝承したので、中南部地方の鯨神祭は中部地方より新しい。南部地方のプンタウ市カンゾ漁民には中部地方出身者が多かったため鯨神祭は南部地方でも盛んであったが、ベトナム戦争以後からは迷信とみなされ、その上、都市開発などで衰退しつつある。

ニャチャン海洋文化院は、沿岸地域に独特な宗教文化である鯨神信仰を観光資源として開発するため鯨神祭を組織化している。それに、中央政府機関の文化推進庁は2003年から観光と民俗文化振興のため補助金を出すようになってから鯨神祭は盛況し、大規模化している。村で鯨神祭を行うときは省や県などの地方政府官吏を招待する。地方政府官吏は村の鯨神廟を文化財に指定して鯨神祭を行うことができる許可権を村に与えるからである。そのため文化財に指定された鯨神廟も新築、大規模化している。鯨神祭は仏教、儒教、土着信仰が混ざって行われる。骨の大きなクジラはゾウといい、イルカの骨とともに海から来たものは崇拝しているので、海岸に漂着されたクジラやイルカの死体は先祖と同様に埋葬して入棺する。漁民は漁に出たときよく会うクジラから漁や海難事故の際に助けられるので、親しさやありがたさを感じる。クジラも風浪のときはどこかに頼ろうとして物体を海辺に押す習性があるが、漁民はクジラが救助したと信じ、神霊性を持って現在にも祭を行っている。

3 韓国古代の鯨神信仰

3.1 岩刻画に見られる捕鯨活動

19世紀末から捕鯨基地となった蔚山市長生浦から約26キロメートル離れたところに、紀元前4000年から紀元前1000年の間の生業や宗教活動が刻まれている盤亀台岩刻画がある。蔚山湾に流れ込む太和江の支流沿いの内陸に位置し、11月～5月の渇水期以外はダム水面下に沈んでいる。岩刻画の大きさは縦3メートル、横10メートルで、約300点の人や動物の絵が岩の表面に刻まれている。

図2の左側には鯨類を中心とした海の動物が、右側にはシカ、イノシシなどの陸の動物が面刻と線刻の技法で刻まれている。クジラなどの海の動物はほとんど面刻で表現されている。その面刻の上に線刻が重ねて彫刻されていることから、面刻は線刻より時期が早い。面刻つまり時期の古い海の動物は主に画面の左側に、線刻つまり時期の新しい陸の動物は主に右側へ施されている。岩刻画の彫刻技法から蔚山湾に繋がるこの地域は、約6000年前には海上で鯨類を中心とした漁撈生活が、約3000年前からシカやイノシシなどを中心とした狩猟生活に変わっていたのである（黄・文 1984）。

岩刻画には捕鯨船や鉤に刺されたクジラ、生物学的特徴で判別できるクジラを刻んで捕鯨活動を詳細に描写されている。図3の左側から見ると、赤色①はコククジラ、②は紐が付いた鉤に刺されたコククジラ、③はコククジラ、④は海藻の中で索餌しているクジラ、⑤は仰向しているザトウクジラ、⑥はセミクジラ、⑦はシャチ、⑩はサメクジラである。右側の⑧と⑫は解体されたクジラ、⑨はマッコウクジラ、⑪は仰向しているクジラである。これらクジラの種類別特徴を見ると、①は、コククジラの親が子を背中に背負っていくのを上から見た絵である。③はコククジラが仰向している絵で、腹部に5

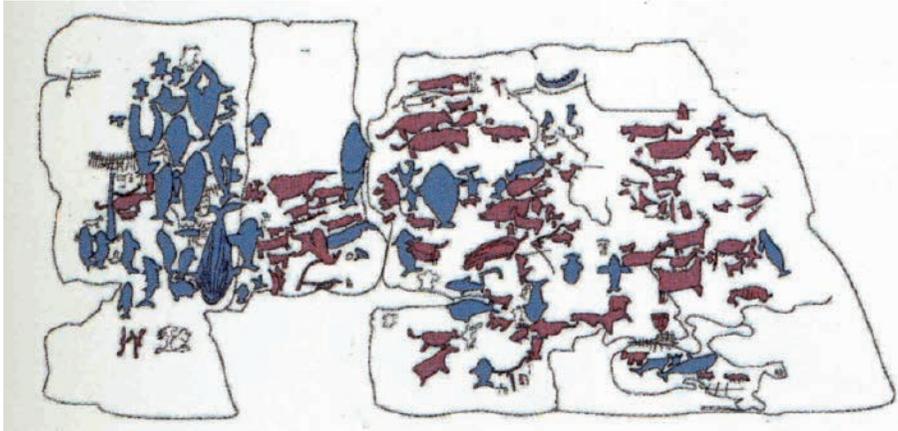


図2 岩刻画の彫刻技法（青色の面刻：海上動物，赤色の線刻：陸上動物）
（蔚山広域市南区庁 2005年より引用）

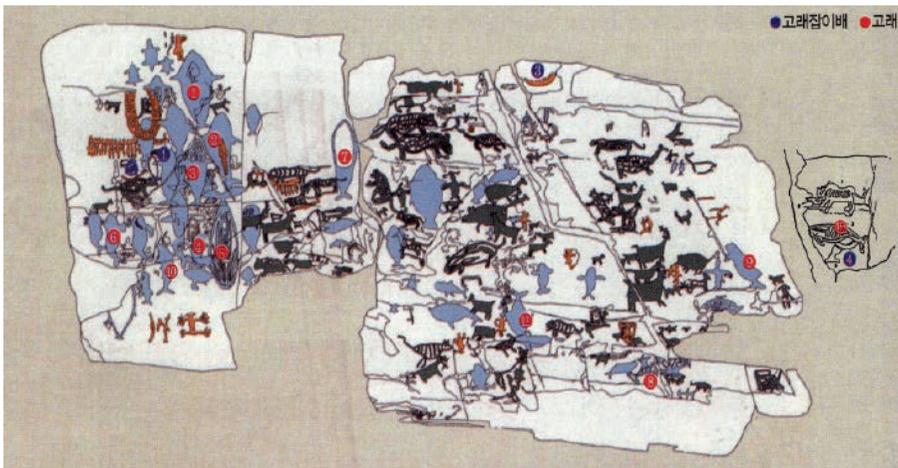


図3 盤亀台岩刻画の捕鯨船と鯨類
（蔚山広域市南区庁 2005年より引用）

本ほどの線が鮮明に示されている。⑤はザトウクジラで臍まで数本の縦シワが通っている。⑥はセミクジラの口の部分と、息を吐き出すときの形をよく掴んでいる。⑦はシャチの腹とヒレをはっきりと描いている。このように盤亀台の岩刻画には6種類のクジラを含めて52点のクジラが岩の側面に刻まれている（蔚山広域市南区庁 2005）。

図3の左側の青色①はコククジラを引っ張っていく船であり、②は18名の人を乗せた船の縄がクジラに繋がっていてクジラと船の大きさや長さが非常に正確な絵である。右側の③はクジラを獲っている捕鯨船であり、④は捕鯨船の左側にヒツジの革製の浮きが

付き、獲れたクジラが海中に沈まないようにするために使われている。

3.2 岩刻画の宗教的・教育的機能

図4の4つの人物絵は、シャーマンとしてクジラの豊漁と漁民の海上安全を祈願することを意味するものであると思われる。当時と直接なつながりはないが、韓国では今でも山や川辺の大きな岩が女性シャーマンたちに寄って祈祷する場所として利用されている。住民の話によると、近年も渇水期には盤亀台の前でシャーマンが祈願場所として利用したことがあるという。そのため盤亀台は宗教的な意味をもつ場所として機能していたことが考えられる。

また、岩刻画には、クジラの種類別特徴と捕鯨技術を詳細に描いて後継者に伝える教育的機能もしていたことも考えられる。そして海岸線が現在の蔚山湾に海退するほどの自然環境の変化が起きて狩猟・漁撈・採取生活から水田稲作農耕生活に生業様式が変わるが、漁業者は專業集団となって豊漁と海上安全を守る鯨神を信仰し続けていたと思われる。

クジラと人とのかわりかは2, 3世紀頃朝鮮半島南海岸に位置する靑島貝塚で出土した潜水漁用の鹿角製や鯨骨製のアワビおこしが、西北九州型結合釣針と一緒に出土していることからもうかがい知ることができる。対馬海峡を挟んで朝鮮半島東南海岸と日本西北九州沿岸の貝塚から相互の交流が考えられる遺物が出土している。サメやマグロなどの大型魚類を捕獲対象とする結合式釣針などは日本の縄文時代に両地域の漁民間の交流を示す代表的な遺物である(渡辺 1983: 61-65)。武末は、日本の縄文時代中期から出現する北部九州型鯨骨製アワビおこしが韓国南海岸の靑島貝塚より先に出現したことから日本から移住してきた弥生人の影響であることを明らかにした(武末 2009: 289-291)。

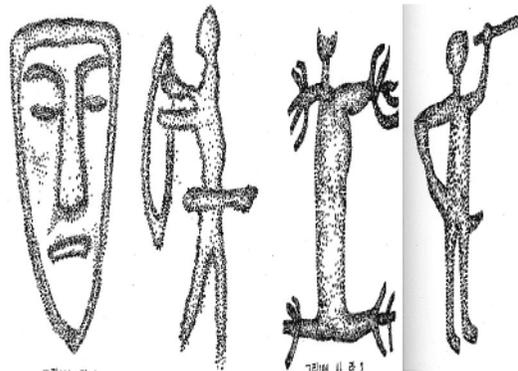


図4 岩刻画に描かれている4つの人物絵
(蔚山広域市南区庁 2005年より引用)

しかし、クジラの南下や北上する際に通る蔚山や釜山沿岸の貝塚で縄文時代の鯨骨製漁具出土例の報告はあまりない。また、蔚山に近い釜山市水営江河口に立地した蓮山洞古墳群では5～6世紀頃の鉄製の銚や釣針が鉄製板甲衣と円頭大刀、弥生系土器とともに大量に出土している（釜山市立博物館 2014）。これらの遺物から南海岸を拠点に活動した支配勢力が、日本の多様な政治勢力と交流していたことが読み取れる。海での活動には当然、豊漁と海上安全を祈願する鯨神信仰も伴っていたはずである。そこで韓国の東南海岸地域におけるクジラは漁民に豊漁をもたらす神、海上安全を祈願する特別な存在として信仰されていたため、鯨骨製漁具としての利用はあまりなかったのではないかとと思われる。

4 仏教と鯨神信仰の融合

朝鮮半島の古代の多くの土俗信仰は4世紀末に王権を強化するため中国から伝来された仏教に統合される。鯨神信仰もその土俗信仰の一つである。仏教が新羅（BC 57-AD 935）に伝わったのは、5世紀頃高句麗からで、仏教の象徴動物の一つは龍である。

龍は想像の動物として数千年の間その時代や地域の政治的状況と必要によって変化、発展を遂げて来た。それは個人や集団、国家が龍のもつ神秘性と神聖な力を借りようとしたからである。韓国の仏教説話の中には、支配者としての龍、水をつかさどる龍、守護神の龍、救援の龍など多様な意味で登場している。龍に対する認識は、5世紀からは古代国家体制を整えて王権を強化する過程で支配階級の威勢の象徴となり、7世紀から14世紀末までは護法龍、護国龍に変わり、儒教を国教とした朝鮮王朝時代の15世紀からは絶対的な王の権威を示すものとなっていく（Jang 2017: 53-63）。

高麗時代（918-1392）の僧侶の一然が書いた歴史書の『三國遺事』（1281年）に二十八龍王、海龍、東海龍、護国龍、海中大龍、護国大龍などの龍の名称が記されているが、護国龍は新羅だけ用いられている。特に護法龍は新羅の文武王（626-681）が、唐や倭からの攻撃に対して仏教の力を借りて国を護るという意識の中で形成され、7世紀以後から王が国を護るように、龍が国を護り、仏教の教えを守護する護法龍として表現されていた（Song 2017: 105-122）。

蔚山市から北方に20キロメートル離れている甘浦海岸に大王岩という文武王の水中王陵がある。『三國遺事』によると、文武王は死後に東海の護国龍になって国を護りたいので仏教式に火葬してその灰を東海に撒くようにと遺言したという。また、文武王陵碑文を載せている海東金石苑（1796年）の一文に、「派鯨津氏映三山之□」、「滅粉骨鯨津嗣王」と記されている。前文の鯨津氏は、人格化されたクジラを表す新羅の護国神である。つまり、鯨津氏が三山に映っているのは、クジラを海神として信仰されていることを意味する。後文の「鯨津」は、文武王の粉骨を撒いた大王岩つまり文武王陵がある海域の

ことを表し、新羅の文武王の世界観には古代の鯨神信仰が仏教と融合されている。

さらに、『三國遺事』の記録に出てくる怒鯨は、海の神のクジラが怒ると、荒波と風浪を起こすので、新羅の王は怒鯨の力を借りて荒波と風浪で唐兵や倭兵を鎮圧しようという認識と護国観の現れである (Song 2017: 105-122)。

新羅は640年頃から830年頃まで約200年の間多くの留学生や僧侶が海を渡って唐に留学する。また商人は現在の福建省まで進出して江南地域の大きな港に形成された新羅人村を拠点に海上交易を行っていた。そのとき唐を通して密教が伝わり、先述したベトナムと同じく魚が変わって龍になり、龍が変わって魚になる化身信仰や、海上での身の安全を願う仏教の女神信仰が形成されていた。

このように朝鮮半島の東南海岸域で豊漁や海上安全のために海神として信仰された既存の鯨神信仰は、新羅が三国の統一や日本と中国から国を護るなど国内外の政治的状況や時代的背景から外来の仏教と融合されていたと思われる。また、海人間の交流の中で、仏教の観音菩薩信仰が舟山群島から黄海や東シナ海域まで広まる中で中国の航海安全を祈念する女神の媽祖信仰と結びついた観音信仰とも融合されたと思われる。しかし、15世紀以後からの朝鮮王朝の崇儒抑仏政策により仏教の衰退と同時に鯨神信仰も消滅していく中、護国龍は王の象徴として絶対的な神の地位を獲得する。

一方、新羅時代の仏教と鯨神信仰との関係は龍頭と撞木で現在まで生き続けている。寺で使われる鐘は、天井に吊すとき綱を通すために飾られている龍頭を韓国では蒲牢という。『三國遺事』によると、蒲牢は龍の子で海を支配する神であるが、クジラを非常に怖がり、クジラを見るだけでも鐘が鳴るような音で吼える。そのためクジラの形をした撞木（皆有闕有蒲牢鯨魚為撞）で鐘を叩き鳴らすと大きくて力強い音色が出るという。蒲牢が龍の形にしているのは日本や中国も同じであるが、クジラの形に彫刻した撞木で鐘を鳴らす発想は韓国だけの特徴である。韓国の僧侶たちは、撞木がクジラの形をしていないのにクジラと呼んでいるという (崔 2008: 97-105)。

他にクジラとのかかわりは韓国の諺や比喩、地名、口伝などにも登場する。まず諺には「クジラの喧嘩にエビの甲羅が裂ける」といい、強い者どうしの争いに弱いものが巻き添えを食って被害を受けるという意味である。次の「クジラの背中のような」大きな家や、大酒飲みの「酒鯨」などは巨大なイメージをクジラに比喩している (李 2006: 37)。鯨汀、鯨島、鯨串などのようにクジラがついた地名もある。慶尚北道盈徳郡炳谷里にある鯨汀は、高麗時代の李穡 (1328-1396) という儒学者が砂浜でクジラが泳いでいるのを見てつけた地名である。また釜山市多大浦の前にある鯨島は、島がクジラの形をしているためつけられた地名である (韓国国土地理情報院 2011)。口伝には、韓国の西海岸に位置する黒山島沙里に住んでいる70代 (2008年現在) の朴という人の先祖は19世紀半ば頃、海上で暴風に会って漁船が漂流するとき、クジラに救助されたことで、その子孫たちは代々鯨肉を食べないという (韓国精神文化研究院編 1992: 392-393)。このように

鯨神信仰は仏教や龍神信仰と融合され、大きくて強い、恩恵を施す動物というイメージで韓国人の生活の中に現在も生き続けられている。

一方、韓国沿岸では1945年から積極的な捕鯨活動が行われ、鯨肉は一般庶民の貴重なタンパク質の供給源となった。しかし、1986年から国際捕鯨委員会による商業捕鯨禁止でもっぱら定置網に混獲された鯨肉のみ食用とされ、需要が供給をはるかにうわまって現在は高級食材になっている。そのためクジラは鮮度や大きさによって一頭当り最高一千万円で売られているので、漁民たちはクジラを海の宝クジとも言う。さらに、2005年蔚山市で国際捕鯨委員会総会を開催されることで国際環境保護団体のグリーンピースと韓国環境保護団体の環境運動連合は韓国政府や市民に鯨肉の商業用の流通を禁止してクジラを保護することを訴えた。また、環境運動連合はクジラが泳いでいる蔚山湾沿岸を海洋生物保護区域に指定してクジラを保護し、蔚山市をクジラ観光都市にすることを提案した。これを契機に韓国内の世論は、鯨肉食伝統文化の継承と反捕鯨運動に二分化して対立されるようになった。そして20世紀以降から人間の食資源となったクジラは、21世紀初頭からの環境保護運動により観光資源化され、現在は動物の権利と動物福祉論により人間を保護する神から人間に保護される神に変わりつつある。

5 おわりに

以上のように古代の韓国とグエン王朝期のベトナムにおける鯨神信仰の事例を宗教人類学的観点から比較分析すると、以下の3点にまとめることができる。まず、クジラは海人の豊漁と海上安全のために信仰され、新羅やグエン王朝期のように国家とのかかわりの中で発展してきたことである。次に、鯨神信仰は、韓国では儒教や近代化の中で、ベトナムではキリスト教や近代化で迷信とされるように、国内外の政治的・経済的状況や外来の世界観・価値観に影響されて衰退、変容していくことである。最後に、韓国やベトナムのクジラは地域振興のため、人を護る神から人に守られる神に変わりつつあることである。現在の韓国は蔚山・釜山・ソウルを中心に高級料理として鯨肉を食しているが、ベトナムは鯨神として信仰しているように同じ時代でも地域によってクジラとのかかわり方が違う。また、韓国のように同じ地域でも時代によってクジラとのかかわり方が異なる。しかし、時代や地域によって多様なクジラと人のかかわりは、これからも変わらないと思われる。

記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究—伝統継承と反捕鯨運動の相克」(研究代表者：岸上伸啓，基盤研究 (A) JP15H02617海外学

術調査) による研究成果の一部である。

参照文献

フレデリック, J. S.

2002 『肉食タプーの世界史』 山内昶監訳, 東京: 法政大学出版局 (初出は2001年)。

釜山市立博物館

2014 『蓮山洞古墳群第2次発掘調査報告書』 釜山: 釜山市立博物館。

崔 瞳益

2008 「盤亀台岩刻画から長生浦捕鯨博物館まで」『立教大学日本学研究所年報』7: 97-105。

黄壽永・文明大

1984 『盤亀臺岩刻画彫刻』 ソウル: 東国大学校博物館。

李 善愛

2006 「地域文化の生成過程—鯨とのかかわりをとおして(1)」『宮崎公立大学人文学部紀要』14(1): 35-52。

2012 「韓国の捕鯨文化—蔚山地域を中心に」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp. 264-281, 東京: 成山堂書店。

Jang, Y. J.

2017 「龍, 支配者の象徴—古代社会を中心に」『帝王の龍, 海の龍』pp. 53-66, 釜山: 韓国国立海洋博物館。

河島基弘

2011 『神聖なる海獣—なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか』 京都: ナカニシヤ出版。

韓国精神文化研究院編

1992 『韓国民族文化大百科事典 第2巻』pp. 392-393, 城南: 韓国精神文化研究院。

韓国土地情報院

2011 『韓国地名由来集 慶尚編地名』ソウル: 国土地理情報院。

岸上伸啓

2017 「捕鯨と動物福祉」『人文論究』86: 71-81。

小島孝夫

2009 『クジラと日本人の物語—沿岸捕鯨再考』 東京: 東京書店。

大西和彦

2008 「阮朝期ベトナムの鯨神信仰とその背景」『立教大学』7: 39-48。

朴 九秉

1987 『韓半島沿海捕鯨史』釜山: 太和出版社。

2003 「盤亀臺岩刻画に現れた鯨類と捕鯨」『水産業史研究』10: 35-61。

Song, H. S.

2017 「新羅の護國龍と鯨の認識及び信仰—『三國遺事』萬波息笛と文武王陵碑を中心に」『帝王の龍, 海の龍』pp. 105-122, 釜山: 韓国国立海洋博物館。

武末純一

2009 「三韓と倭の交流—海村の視点から」『国立歴史民俗博物館研究報告』151: 285-306。

蔚山広域市南区庁

2005 『長生浦鯨博物館』 蔚山：蔚山広域市南区庁。

渡辺誠

1983 『考古学シリーズ4 縄文時代の知識』 東京：東京美術。

渡邊洋之

2006 『捕鯨問題の歴史社会学—近現代日本におけるクジラと人間』 東京：東信堂。